

「『ユイムン』という嗜好品 ―沖縄における寄り物思想とマイナー・サブシステム」

ユイムン

沖縄における「寄りもの」のこと。ただし多くは海洋生物のことを指す。⇒ 狩猟採集行為を伴う

- ・多くは季節性がある。
- ・多くに反復性がある。
- ・その年に来るか来ないかは「運」。非日常的な存在。⇒ メジャー（主栄養品）になり得ない、積極的な栄養摂取を目的としない。しかし「旨い」。⇒ 「嗜好品」としての地位
- ・なんらかの意味での「報酬」。経済的・栄養的価値もある ⇒ それを獲る行為は「真剣なあそび」

寄り物思想

ユイムン ⇒ 神からの贈り物。独占の戒め。平等な分配。金銭交換の禁止（現在は崩れている）。

- * 琉球弧：海の彼方＝ニライカナイ（神の領域）⇒ 海の向こうから来るものは神に由来
- * 「なぜそれが寄るのかを誰も説明できない」。ユイムンの持つ反復性＝非偶然。特にスク（アイゴの稚魚）は旧暦6、7月の1日～3日（新月の大潮）と決まっている ⇒ 「不思議」な自然への尊敬・・・人智の及ばない点について神と自然の区別は非常に曖昧

マイナー・サブシステム

「いつも集団にとって最重要とされている生業活動の陰にありながら、それでもなお脈々と受け継がれてきている副次的ですらないような生業活動」（松井1998）

- ・消滅したところで、たいした経済的影響をおよぼさないにもかかわらず、当事者たちの意外なほどの情熱によって継承されてきたもの（しかし、経済的意味が少しでもあることが重要）
 - ・きわめて身体的な、自然のなかに身体をおき身体を媒介として対象物との出会いを求める行為
- ⇒ 伝統的な生業、経済活動：「量の問題」（経済性）から「質の問題」（楽しみ）への視点転換
⇒ ユイムンをめぐる活動 = マイナー・サブシステム

問 い

マイナー・サブシステムは「経済的意味は小さいながら、生活の質を豊かにする活動」だといわれている

寄り物思想を背景にもつ嗜好品である「ユイムン」をめぐる活動が、
実際に「どのように・どのような」生活の質を豊かにしていると言えるのだろうか？

マイナーであることの意味

「物」プラス「行為」から、嗜好品のもつ可能性を考える

1. ユイムンの世界

ユイムンの種類

代表的な物にスク（アイゴの稚魚）、ヒートゥ（主にゴンドウ類）。ザン（ジュゴン）や鯨などの大型海洋生物も。そのうち、ヒートゥ漁は1989年を最後に禁止、現在は県知事の許可制。ザンや鯨はもともと滅多に寄らないが、記憶の中で強烈。

⇒ ヒートゥも交えながら、現在も盛んなスクを中心に考察

ユイムンの民俗

- ・「施政者の力量のあかし」 ⇒ 大漁する／しないで時の施政者の持つ力量（運）を見極め
- ・「語彙、逸話」 ⇒ 自然の見極め（海荒れに関する季語や雷と受胎の関係に関する話など）、戒め（ケンカをしたから寄らなくなった、海にコンクリートを入れたから来なくなった、シーサー（魔除け）を多く海に向けたから来なくなった ⇒ 後ろの2つは上の施政評価の現代版とも言える）など。

ユイムンにかかわる行為の3類型

1：「祈る」 新城のザンヌオン（ジュゴン御嶽）、名護は「ピトゥガナシ」（ガナシは可那志、王や神への尊称）、古宇利のピローシ（イルカ獲りの儀礼）、久高のキシクマーイ（スク漁そのものが神事）など。

- 2: 「食す」 大型の場合、お宮で炊き、配ることも。分配、共食。ヒートゥは汁、炒め物。スクはスクガラス（塩漬け、保存）、生の刺身（冷蔵庫普及後）。
- 3: 「獲る」 名護等のピトゥ漁（追い込み漁）、沖縄各地のスク漁（追い込み網漁）。単純な道具。集団性、身体性、娯楽性、賭博性、信仰性。

2. 祈る・獲る・食べる

イノーという空間

- ・ ユイムン漁が行われるのは「イノー」。遠浅の礁池。地先の海だが、感覚としては海と陸の間、半海。
- ・ 特に浜に近いところは「おんなこども」の海でもある。「おかずとり」の海。
- ・ 共有される空間、「コモنزの海」（玉野井1985）。浜下り、イジャイ（夜の潮干狩り）。
- ・ 身体に深く刻まれた空間。イノーの微少地名（関2011、高橋2004）。未知の空間から熟知の空間に訪れる＝対比が生む神秘性。

ヒートゥ漁

- ・ 名護（文献）、古宇利島（聞き取り）。ヒートゥ汁、ヒートゥイリチャー。古宇利ではお宮で炊いて共食。ヒートゥは子どもでもローブを捕まえたり触ったりただけで「タマシ」（取り分）がもらえた。
- ・ 現在は免許を持った漁師が沖合で獲る。市場ではいまだに人気。すでにユイムンとしての漁ではないが、ピトゥ＝ユイムンとの意識。

スク漁

- ・ スク漁は一応「漁への参加」がタマシをもらえる条件（漁に危険性が伴うヒートゥ漁は子供は漁自体には参加出来ない。スク漁は小学生くらいになったら参加出来る → 配分の条件は広くタマシが行き渡ることを前提とした、一応の正統性の付与だろう）。
- ・ 久高島、安田、奥武島の各例（参与観察）。神事と報酬と遊びの混合。神事性が強い久高、報酬性が強い奥武島、娯楽性が強い安田、と違いも（生業の度合いとも関連）。
- ・ 原始的で単純な道具、手法 ⇒ 深い知識、経験の必要。
- ・ スクガラス、刺身。処理法のこだわり、遠方からの買い求めの客。

3. ユイムンが豊かにする世界

- ・ 強まる嗜好品の側面：希少性の増加（資源の減少）、生活上の需要の低下（他資源の増加）、生鮮性。
- ・ 復活する自然への敬意：神と自然の別の曖昧さ、それらに対する驚異の機会（スクの反復性は強い神秘性）。
- ・ マイナー＝非経済的領域 からくる平等性、非進化性、身体性。
- ・ マイナーであることを支える娯楽性、嗜好性。美味しくなければ獲らない、楽しくなければ獲らない。
- ・ ユイムン（スク）漁 ⇒ 誰でも参加してよい_____「みんなの海」の復権。現出するかつての「共」的世界。知識の伝承。社交の空間。
- ・ そもそも「みんなの海」であった頃、海はセーフティネットだった。山がなくても土地がなくても道具がなくてもイノーに出れば命を繋げることが出来た_____弱者を支える海。イノーは誰でもが生きられる世界。弱者生存権（鳥越1997）。
- ・ それが制度化、専門化することによって変わっていく + 開発による資源自体の減少_____「海」の変容。



海の変容が進む現在社会のなかで、嗜好性を通じた

共的世界（平等性、社交性）の復権 + 身体化された自然の継承の機会 という生活の質の豊かさを

ユイムンをめぐる活動（＝マイナー・サブシステム）は 提供している

引用文献：

- 松井健、1998「マイナー・サブシステムの世界」『民俗の技術』.pp247-268. 浅倉書店
玉野井芳郎、1985、「コモنزとしての海」『南洋文化研究所所報』27
鳥越皓之、1997「コモنزの利用権を享受する者」『環境社会学研究』(3),pp.5-14.